

第百四十二話 台湾で神になった日本軍兵士

寡聞にして承知しておらず、不明を恥じる。「大東亜戦争秘録 鎮魂の旅」（早坂隆著 中央公論社刊）に収載されている美談である。第六十五話でも取り上げた台湾沖航空戦（1944（S19）年10月12日～15日）で撃墜された日本海軍飛行兵曹長（戦死後少尉）が村を救ったとして祀られているのである。日本軍兵士が外地で祀られている唯一の例である。1999（H11）11月22日に起きたT-33A入間川墜落事故と同様のケースである。

1 飛虎將軍廟の概要

○ 正式名称：鎮安堂 飛虎將軍廟（飛虎は戦闘機、將軍は兵士の尊称）

○ 所在：台南市南区同安路127号

○ 祭神：日本海軍軍人 杉浦茂峰

（杉浦茂峰略歴 1923～1944 水戸市出身 乙種飛行予科練に入隊 零戦三二型機でF86Fと交戦、撃墜され戦死（20歳）（1944/10/12））

○ 建立：1971年 殉職地に程近い四坪の地に祠

1993年 拡張計画「飛虎將軍廟」決定、造営

○ 維持管理：地元住民 朝夕二回彼がヘビースモーカーだったこともあり、煙草を線香替りにお供え。祝詞として「君が代」「海行かば」を奉歌



2 村への墜落回避行動を住民目撃、そして感謝

杉浦兵曹長は、来襲する多数の敵機を迎撃すべく発進、壮絶な空中戦が展開された。杉浦の搭乗した零戦も被弾、尾翼から火を噴き、みるみる高度を失ったと目撃者は語る。落下する機体は「海尾寮」という名の大きな集落に向かっていった。その光景に現地の人々は「村が大変なことになる」と瞬時に思ったという。杉浦は落下傘で緊急脱出できるタイミングだったが、彼は村への墜落を回避すべく、愛機を懸命にコントロールしようとした。

程無くして、村人は感嘆の声を挙げた。戦闘機の軌道が明らかに変化したことに気付いた。辛うじて機種を上げ、体勢を僅かに立て直した機は、そのまま村の東側を通過して郊外の畑地の方角へと蛇行しながら飛び去った。此処において杉浦は漸く脱出、落下傘を開いた。その直後機体は空中で爆発した。

間一髪で脱出に成功した杉浦だが、彼の背後に肉薄したグラマンが猛烈な機銃掃射を加えた。彼は地面に叩きつけられ、絶命した。「養殖池の近くでした。彼の身体は、仰向けになって倒れていました。両手両足を広げて、まるで漢字の「大」の字のようでした。」と語る。名前は、「杉浦」と飛行靴で知れるのみであった。

戦後、村人の間で不思議な夢を見たという噂が流布し、“白い服を着た日本の若い軍人が枕元に立”ったのは、杉浦であろうとされ、地域の守り神にお伺いを立てたところ彼を祀る祠を立てるべしとの御託宣があり、祠建立となったのである。

3 祠建立の背景

李鴻章が化外の地とよんだ台湾は下関条約（1895年）によって日本の統治するところとなった。日本の善政は台湾住民に受け容れられ、日台関係は良好であった。これが杉浦への感謝ともなったのであろう。

外省人による放火事件があり、また抗議もあった由。が、祠建立後、村は豊作に恵まれるなど天祐が続いた。今なお、参詣者が絶えないと云う。神像が2016年には里帰り

* 日台関係の一層の親密化を切望するものである。また、今に続くパイロットの心意気に感動を覚える。

（第百四十二話 了）